

京都臨濟宗各本山寺院の「〇〇面」について

——「妙心寺の算盤面」由来試論——

加藤 一寧

はじめに

京都の臨濟宗の本山寺院は、その特徴をとらえて「〇〇面」と称される。たとえば『京都・観光文化検定試験 公式テキストブック』「初版」「改訂版」「増補版」(淡交社、二〇〇四・二〇〇五・二〇一〇、以下、三つの版をまとめて「旧版」と略称。なお頁数は「増補版」に拠る)には次のように記される。

- ① 茶道との関わりが深く、千家の菩提寺である聚光院をはじめ、ほとんどの塔頭に茶室があり、俗に「大徳寺の茶面」と称される(九五頁)
- ② 武家の信仰が篤く、「南禅寺の武家面」と称された(二〇一頁)
- ③ 俗に「建仁寺の学問面」といわれ、詩文芸術に秀でた禅僧を輩出、五山文学と称される文芸を創り出した(一〇三頁)
- ④ 寺名は規模を東大寺に、教行を興福寺にならって、東福寺と付けられた。建武元年(一三三四)には京都五山の第三位、大伽藍を有する寺となり、俗に「東福寺の伽藍面」といわれた(二〇五頁)
- ⑤ 徹底した組織運営を得意とし、臨濟宗きつての巨大教団を形成した足跡から俗に「妙心寺の算盤面」

と称された(一〇八頁)

しかし、私はこうした「〇〇面」に関して三つの疑問を抱く。

第一に、京都の臨濟宗の本山寺院には、他にも相国寺や天龍寺があげられるが、【旧版】には、この二ヶ寺の「〇〇面」に関する記載がない。それはなぜなのか。少なくとも相国寺については、後掲のように「相国寺の声明面」が多くの書籍に掲載されている以上、【旧版】はその理由を説明すべきであった。

第二に、「京都・観光文化検定試験」いわゆる「京都検定」において⁽¹⁾、かつては毎年「〇〇面」に関する出題があったが、この数年の間に、その出題がなくなってしまうている。それはなぜなのか。具体的には、「京都検定」の第一回から第七回(二〇〇四～一〇)までは「〇〇面」に関する出題があったが、第八回(二〇一一)以後―ただし第一一回「京都検定」三級試験(二〇一四)は唯一の例外だが―、第一九回(二〇二二)に至るまで、その出題はない⁽²⁾。

もともと第一三回「京都検定」(二〇二六)以後については、『京都・観光文化検定試験公式テキストブック』(以下「公式テキスト」と略す)の「新版」(淡交社、二〇一六、以下、【新版】と略称)と【旧版】の違いをもって説明できる。【旧版】に掲載されていた「〇〇面」が、【新版】では全て削除されているからである⁽³⁾。そして「京都検定実施要項」によると、出題は『公式テキスト』に準拠するのだから⁽⁴⁾、【新版】で削除された「〇〇面」が、平成二八年(二〇一六)以後の「京都検定」で出題されるとは到底考えられない。

第三の疑問は、前掲①～⑤の傍線部によると、「〇〇面」は俗称となるが、他の書籍ではその表現に違いがある。後掲のように、京童の口遊や京童の囃子言葉であったと記すものもあれば、あだ名・キャラクターであったと記すものもある。また、諺・俚諺であったと記すものもある。それはなぜなのか。

一、「〇〇面」の用例の検討

かかる三つの疑問を解決するには、時間をさかのぼって「〇〇面」の用例を収集し、その変遷や由来を明らかにする必要がある。ただインターネット上にも「〇〇面」に関する言説は多い。もちろんインターネット上の情報に言及する必要など全くないとの批判があるのも承知しているが、その中でも特に大衆で専門教育を受けていたと思われる人物や図書館員などの専門家が発信する「〇〇面」に関する情報は、その影響も大きいため、ここでは、それらの大半が当然なすべき考証の手続きを怠っていることだけは一旦指摘しておかざるをえない⁽⁵⁾。

以下、複雑になるが、根拠を明確にするために、「〇〇面」の用例を列挙する。ただこの調べは網羅的でないだけでなく、偏りもある。たとえば戦後から一九六〇年代前半の用例を私は見つけることができなかつた。そうした不備・偏りは承知しつつも、その結果を最初に表Ⅰにまとめ、判明した三点について述べておこう。

表1

昭和		平成	
書名など	年月	大徳寺	南禅寺
《新版》〔京都・観光文化検定試験 公式テキストブック〕〔新版〕	二〇一六		建仁寺
《1》三井記念美術館 土曜講座「瑞巖寺の歴史と文化」	二〇一六	茶面	東福寺
《2》山折哲雄監修「あなたの知らない茶西と臨済宗」	二〇一四	茶面	妙心寺
《3》《5》《7》『古寺巡礼 京都（新版）』	二〇〇六・二〇〇七・二〇〇九	茶面	天龍寺
《旧版》〔京都・観光文化検定試験 公式テキストブック〕「初版」「改訂版」「増補版」	二〇〇四・二〇〇五・二〇一〇	茶面	相国寺
《8》竹貫元勝『京都の禅寺散歩』	一九九四	茶面	由来（発生時期） 他
《9》藤井宗哲『禅寺の食卓——宗哲和尚の精進料理——』	一九九二	茶の湯面	
《6》司馬遼太郎「連載紀行第八六二回 街道をゆく 大徳寺散歩①紫野」	一九八九	茶面	
《10》《11》『国史大辞典』	一九八五・一九九六		
《12》《14》『大百科事典』	一九八五	茶面	
《15》《18》『古寺巡礼 京都（旧版）』	一九七六・一九七七	茶人面	
		武家面 役人面	
		学問面	
		伽藍面	
		算盤面	
		武家面	
		声明面	
		京童のつけたあだ名・京都の各山の特徴を揶揄的に呼びならわす言い方・俗称・江戸時代	
		俗称	
		俗称	
		あだ名	
		方	
		各山の特色をヒヤカシ含みにいう禅門での言い方	
		俗称	
		俗称	
		家風	
		俗称	

〔19〕 泉澄一「天龍寺第二〇九世・中山女中和尚について」	一九七三									俗称
〔20〕 荻須純道「妙心寺のそろばんづら」	一九七二	茶人面	僧録面	学者面	伽藍面	算盤面	武家面	声明面	各本山禅寺の特色をとらえて批評した卑語	
〔21〕 『京都の歴史三 近世の胎動』	一九六八	茶面		学問面	伽藍面	算盤面		声明面	京童説	
〔22〕 近重真澄「茶道百話」	一九四二	お茶人面							俚諺	
〔23〕 山田霊林「禅学入門の書」	一九三七	茶の湯面				算盤面	伽藍面	声明面	徳川時代	
〔24〕 「一頁人物評論、尾関本孝」	一九三四				伽藍面				俗称	
〔25〕 村田無道「妙心寺の算盤面」(『参禅実話』)	一九二六・七	茶の湯面			算盤面	伽藍面	声明面	声明面	京都の臨済宗七本山の中の言い	
〔27〕 村田無道「雑纂 寺院経済と雪江和尚」	一九二六・一	茶の湯面			算盤面	伽藍面	声明面	声明面	京都の臨済宗七本山の中の言い	
〔28〕 村田何休「妙心寺の算盤面」(『新布教』二八号)	一九二五・一二				算盤面	伽藍面	声明面	声明面	京都の臨済宗七本山の中の言い	
〔26〕 村田何休「妙心寺の算盤面」(『日本及日本人 臨時増刊第六六五号 郷土光華号』)	一九二五・一〇				算盤面	伽藍面	声明面	声明面	京都の臨済宗七本山の中の言い	
〔30〕 花園隠士「妙心寺史談(六)」	一九二一	茶の湯面			算盤面				俗称	
〔29〕 何休菴主人「妙心寺の算盤面」	一九〇八				算盤面		称名面		京都の臨済宗七本山の中の言い	
〔2〕 「正法輪」二五六号)									草	
〔31〕 燕處子「何故に本山は不信用なるか」	一九〇五								算盤的・算盤主義	

〔 〕内の番号は本稿内での史料番号。* 本山寺院の配列は、〔旧版〕掲載の頁数の順による。* 網掛けは、1・2ヶ寺の「〇〇面」のみを取り上げているもの。
* 「古寺巡礼」などのシリーズものは、一つにまとめた。

第一に「○○面」は、【旧版】に記される「茶面」「武家面」「学問面」「伽藍面」「算盤面」、その他に相国寺の「声明面」が広く知られている。しかし他にも南禅寺の「貴人面」「公卿面」「役人面」「僧録面」・建仁寺の「姫面」・東福寺の「山門面」・天龍寺の「羅漢面」が確認された。また【旧版】とはやや異なる用例として、大徳寺の「茶人面」「お茶人面」「茶の湯面」・建仁寺の「学者面」が見つけられた。さらに相国寺の「声明面」と同音の「称名面」も発見された。

第二に「○○面」と本山寺院の組み合わせについても、【旧版】の組み合わせが唯一のものではなかった。たとえば天龍寺の場合、『公式テキスト』に「○○面」の記載はないが、「武家面」「羅漢面」「学問面」「伽藍面」と組み合わせられる用例が確認できた。

第三に【旧版】は「○○面」を俗称とする。また後掲のように「○○面」が江戸時代に出現したと推測する書籍もある。しかし用例からは、明治時代に俗ではない禅僧たちが使いはじめ、その後、出版物などによって広く知られるようになったと推測される。

尚、以下に掲げる用例については、【旧版】の「○○面」・相国寺の「声明面」との異同を主に付記する。

1、平成〜昭和四〇年代

《1》三井記念美術館 土曜講座「瑞巖寺の歴史と文化」(二〇一六)⁽⁶⁾

(妙心寺の算盤面以外の「加藤補」)他の禅寺のツラを紹介……東福寺は大きな伽藍があり、一〇〇人座れる禅堂があるので伽藍面と言われた。大徳寺は千利休をはじめとした茶人が参禅したことで名が知られているので、茶面と言われる。天龍寺は足利尊氏がスポンサーなので武家面。南禅寺は皇室がスポンサーなので貴人面。相国寺は声明面(しようみょうづら)、建仁寺は学問面(五山文学は相国寺と建仁寺

を中心に発展した)

天龍寺を「武家面」、南禅寺を「貴人面」とする。

《2》山折哲雄監修『あなたの知らない栄西と臨済宗』(洋泉社、二〇一四)

ここでは「〇〇面」の箇所のみを抜粋する。

「建仁寺の学問面」・「東福寺の伽藍面」(六三頁)「南禅寺の武家面」・「天龍寺の羅漢面」・「相国寺の声面」・「大徳寺の茶面」(六四頁)「妙心寺の算盤面」(六五頁)

天龍寺を「羅漢面」とする。また「〇〇面」を「家風」(六三頁)とする。
以下、『古寺巡礼 京都(新版)』(淡交社)の記述を掲げる。

《3》村井康彦「妙心寺の〈算盤面〉雪江宗深の事績」(『古寺巡礼 京都三』 妙心寺(新版)』二〇〇九、一一頁)⁽⁷⁾

雪江の設けた礎石の上にはしっかりと組み立てられた寺院経済組織のゆえに、いつしか巷間で、「妙心寺の算盤面」と称されるようになったのは、むべなるかなである。この諺を耳にする時、わたくしたちは、そのもとなつた雪江宗深らの智慧があつたことを思い起こしたいものだ。

「〇〇面」を諺とする。

《4》山田宗敏「本朝無双之禅苑 大徳寺」(『古寺巡礼 京都一七 大徳寺(新版)』二〇〇七、九九頁)

京童の囃子言葉の「大徳寺の茶面」・「妙心寺の算盤面」(南禅寺の公卿面、東福寺の伽藍面、建仁寺の学者

面、相国寺の声明面しょうみやうめん）はこの辺よりの消息であらう。

南禅寺を「公卿面」、建仁寺を「学者面」とする。また「○○面」を京童の囃子言葉とする。

《5》蔵田敏明「大徳寺 文学散歩」(前掲『古寺巡礼 京都一七 大徳寺(新版)』一〇八頁)

司馬遼太郎は、『街道をゆく』の中で次のように述べている。……(中略)……村田珠光しゅくこう・千利休以来、茶道の本山として知られてきたために、「大徳寺の茶づら」とよばれた。禅僧でありながらしきりに茶の話をする、というところからついたあだなだらうが、このことが大徳寺のえがたい個性をもつくったようである。

「○○面」をあだ名とする。

さて年代が飛ぶが、一旦《5》に引用される『街道をゆく』を確認する。

《6》司馬遼太郎「連載紀行第八六二回 街道をゆく 大徳寺散歩① 紫野むらさきの」(『週刊朝日』一九八九年四月七日号、八二・八三頁)⁽⁸⁾

ここでは「○○面」の箇所のみを抜粋する。

「東福寺の伽藍がらんづら」「天龍寺の武家づら」「妙心寺のそろばんづら」「大徳寺の茶づら」(八三頁)。

司馬遼太郎は、京都の臨濟宗各本山寺院について説明し、その中の四ヶ寺については「○○面」と称されていると記すが、しかし建仁寺・南禅寺の「○○面」には言及しない。また相国寺については、本山寺院としてとりあげもしない。私見では、『公式テキスト』が「相国寺の声明面」を載せないのも、こうしたとり扱われ方が影響しているのではないかと推測する。

《7》村井康彦「東福寺のDNA」(『古寺巡礼 京都三 東福寺(新版)』二〇〇六、一〇二頁)⁽⁹⁾

京都の禅寺、ことに臨濟宗寺院には独特の愛称というか、あだ名^{あだな}が付けられていて、寺の特徴が巧みにとらえられている。それを「××面^{づら}」とはよく言つたものだが、諷刺を得意とする京童の口遊^{きょうわらべくちざさみ}の伝統であろう。相国寺の声明面^{しょうみやうづら}、建仁寺の学問面^{がくもんづら}、大徳寺の茶面^{ちやづら}、妙心寺の算盤面^{そろばんづら}、東福寺の伽藍面^{がらんづら}といった調子である。

「○○面」をあだ名とし、その由来を京童の口遊とする。ただ南禅寺の「○○面」には言及しない。

《8》竹貫元勝『京都の禅寺散歩』(雄山閣出版、一九九四)

ここでは「○○面」の箇所のみを抜粋する。

「建仁寺の学問面」(二二頁)「東福寺の伽藍面」(四五頁)「大徳寺の茶面」(二〇三頁)。「妙心寺のそろばん面」(二三四頁)「天龍寺の武家面」(二八三頁)「相国寺の声明面」(二〇七頁)

天龍寺を「武家面」とする。しかし南禅寺の「○○面」には言及しない。また「○○面」を俗称と見なす。たとえば「人呼んで(東福寺の伽藍面)」という(四五頁)と記している。ただ「妙心寺の算盤面」の由来に関しては、「(妙心寺のそろばん面)」と言われるが、それは、こうした(四本庵などで構成された会計監査委員が出納監査を厳重に行つたという―加藤補) 経済管理に始まる。もつとも(そろばん面)とは、妙心寺の住持となるときに、多額の経費がかかり、その経費を作れない人のために、妙心寺が金銭を貸し出し、利子を稼いだからと、いう話もある(二三四頁)と記す。

《9》藤井宗哲『禅寺の食卓―宗哲和尚の精進料理―』(鈴木出版、一九九二、八一頁)。

昔から禅門では「大徳寺の茶の湯面」という。その伝でいくと、「妙心寺のそろばん面」「建仁寺の姫面」「東福寺の山門面」「天竜寺の羅漢面」「相国寺の称名面^{しょうみやまづら}」などというのだが、それぞれのお山の特色のある種のヒヤカシをも含めてそういうのである。

大徳寺を「茶の湯面」、建仁寺を「姫面」、東福寺を「山門面」、天龍寺を「羅漢面」、相国寺を「称名面」とする。ただ南禅寺の「〇〇面」には言及しない。このうち「姫面」「山門面」は他にその例を見ない。また「〇〇面」を「禅門で……お山の特色のある種のヒヤカシをも含めてそういう」とする。

以下、『国史大辞典』（吉川弘文館）の用例である。

《10》「建仁寺」（『国史大辞典』五卷、一九八五、二一〇頁）

室町時代の最盛時には、塔頭寺院五十余をかぞえ、栄西の法系黄竜派のほか諸派の僧が集まり、参禅の傍ら詩文を勉強し、文筆僧が多く「学問づら」の称があった。

《11》「妙心寺文書」（『国史大辞典』一五卷上、一九九六、一五七頁）

俗に「そろばん面」といわれ、妙心寺は寺院経営に優れていたとされ、その関係の文書が多いが、とりわけ元龜―元和期の会計簿ともいべき米銭納下帳（日單簿）が注目される。

ここで他の辞典類も確認する。

《12》「大徳寺」（『大百科事典』九卷、平凡社、一九八五、四〇頁）¹⁰⁾

また村田珠光は、侘び茶の創始にあたって一休に参禅し、これ以後、茶人の大徳寺禅への傾倒が盛ん

になり、当寺は近世侘び茶の隆盛の結節点の役割を果たし、大徳寺の「茶づら」と世間に評されるようになった。

《13》「東福寺」〔『大百科事典』一〇巻、平凡社、一九八五、六八六頁〕

当寺は他の五山のように全山炎上といった災厄に遭遇することなく、大伽藍の形態が明治初年まで維持されたので、「東福寺の伽藍面」と呼ばれた。

《14》「妙心寺」〔『大百科事典』一四巻、平凡社、一九八五、五二四頁〕

室町中期から幕末に至る膨大な量の会計簿『正法山妙心禪寺米銭納下帳』が残されて、中世近世の経済史の貴重な史料となっている。健全な禅は安定した寺院経済を基礎にして成立するという当寺の伝統は、禅を茶道に密着させた大徳寺の禅を評して「大徳寺の茶づら」というのに対して、「妙心寺のそろばんづら」という呼称を世間に生むもとなった。

管見では、辞典類には《10》《14》の用例しか見つけられなかったが、唯一「妙心寺の算盤面」だけが両辞典に共通する。また「南禅寺の武家面」「相国寺の声明面」は両辞典に採られていない。

以下、『古寺巡礼 京都(旧版)』(淡交社)から列挙する。

《15》杉森久英「南禅寺」〔『古寺巡礼 京都二 南禅寺』一九七七、六九頁〕

京童はむかしから皮肉な人間観察家がそろっていて、信仰と求道のある寺院に、それぞれ現世的性格に応じた綽名をつけた。妙心寺の算盤面、大徳寺の茶人面、東福寺の伽藍面等々である。そし

て、彼等の判定によると、南禅寺は武家面ということになるらしい(ある人は役人面というと、私に教えてくれた。どちらでもいいだろう。封建時代、武士は同時に役人だったから)。

大徳寺を「茶人面」、南禅寺を「役人面」とするが、「役人面」の用例はこの他には後掲の《18》しかない。また「〇〇面」を京童がつけたあだ名だとする。

《16》梶浦逸外「妙心寺の歴史」(『古寺巡礼 京都一〇 妙心寺』一九七七、九三頁)

特に雪江の妙心寺発展に寄与した功績として、その経済的裏づけの基礎となった「正法山妙心寺米銭納下帳」の制度を確定したことを挙げておかねばならぬ。毎年八月一日を会計年度の始めとして、一年間の出納を厳格に記帳せしめたものであって、文明十八年(一四八六)から明治十八年(一八八五)に至る正確な経理が綴られてきたという。大徳寺の「茶人面」、相国寺の「声明面」などと、京都の各山にはその特徴を揶揄的に呼びならわす言い方があるが、妙心寺を「算盤面」と呼ぶのは、こんなことに基づくのではなからうか。

大徳寺を「茶人面」とする。また「〇〇面」を「京都の各山……の特徴を揶揄的に呼びならわす言い方」とする。

《17》有馬頼底「相国寺とその歴史」(『古寺巡礼 京都二 相国寺』一九七六、九九頁)

世に妙心寺の算盤面、大徳寺の茶人面、東福寺の伽藍面、建仁寺の学問面、相国寺の声明面などといって、叢林の特色の一つに数えられてきているのである。

大徳寺を「茶人面」とする。

《18》伊藤東慎「建仁寺とその歴史」〔古寺巡礼京都六 建仁寺〕一九七六、九一頁)

「建仁寺の学問づら」という言葉がある。いつごろから言い出されたかわからない。妙心寺のそろばん面、大徳寺の茶人づら、東福寺の伽藍づら、建仁寺の学問づら、相国寺の声明づら、から、さらに加えて南禅寺の役人づら、天龍寺の武家づらという。なかなか言い得て妙である。おそらく江戸時代にできたものだろう。

大徳寺を「茶人づら」、南禅寺を「役人づら」、天龍寺を「武家づら」とする。また「〇〇面」の成立を江戸時代と推測する。

《19》泉澄一「天龍寺第二〇九世・中山玄中和尚について―対馬以酌庵輪番時代を中心にして―」(『ヒストリア』六三号、一九七三、八五頁)

また世俗では「天龍の学問面」と称している。

唯一の「天龍寺の学問面」の用例である。

《20》荻須純道「妙心寺のそろばんづら」〔花さまざま〕春秋社、一九七二、三二五・三二六頁) ⁽¹⁾

いつごろから誰が言い出したのか知らないが、各本山禅寺の特色をとらえて批評した卑語に、何々面という呼び方がある。天龍寺の武家づら、妙心寺のそろばんづら、大徳寺の茶人づら、相国寺の声みづら、建仁寺の学者づら、東福寺の伽藍づら、南禅寺の僧録づらというのである。

天龍寺を「武家づら」、大徳寺を「茶人づら」、建仁寺を「学者づら」、南禅寺を「僧録づら」とする。このうち「僧録づら」は、他にその例を見ない。また「〇〇面」を「各本山禅寺の特色をとらえて批評し

た卑語」とする。

《21》『京都の歴史三 近世の胎動』(学芸書林、一九六八、一三三頁)

後世、口さがない京童きょうわらべが、京都の臨濟巨利の風を評して、相国寺を「声明しょうみやうづら」、東福寺を「伽藍がらんづら」、建仁寺を「学問がくもんづら」、大徳寺を「茶づら」と言い、妙心寺に対して「そろばんづら」とうたったのは、あるいは実を射ていたともいえようか。

管見では「茶面」の最も古い用例であり、また「○○面」の由来を京童の口遊とする最も古いものである。ただ南禅寺の「○○面」に言及しない。

2、戦時中～昭和初期

《22》近重真澄『茶道百話』(晃文社、一九四二、一四一頁)

大徳寺のお茶人面といふ俚諺がある。

管見では「お茶人面」の唯一の用例である。しかも「○○面」を諺と記す最も古いものである。

《23》山田霊林『禅学入門の書』(実業之日本社、一九三七、六三・六四頁)

京都には禪宗の大本山が幾つもある。中なかに於おいて徳川時代に、特に出色しつっしやくあるものとして人の注意を惹ひいたものが四ヶ寺ある。相国寺の聲明面、天龍寺の伽藍面、大徳寺の茶の湯面、妙心寺の算盤面といふのが即すなわちそれである。

天龍寺を「伽藍面」、大徳寺を「茶の湯面」とする。ただ南禅寺・建仁寺・東福寺の「○○面」に言及

しない。また「○○面」が徳川時代には存在していたかのように記述されている。尚「茶の湯面」については、平成の用例として《9》が挙げられる。

《24》「一頁人物評論、尾関本孝」(『文芸春秋』昭和九年「一九三四」八月特別号、一九三頁)

但馬の一寒村に生れた百姓の子が一代の傑僧、天龍寺の橋本峨山の鉗鎚を受けて悟了底の人となり、東福寺の井上九峰の會下にあつて管長にまでへ上る。これ既に凡人でない。況んや七十五萬圓の巨費を投じて、明治十四年に炎上した、世にも東福寺の伽藍面と云はる、殿堂を再建する。

管見では「東福寺の伽藍面」の最も古い用例である。

以上、平成・昭和の用例から、本章冒頭に述べた三点が理解される。すなわち【旧版】の「○○面」に関する記載とは異なり、(1)他にもいく種類もの「○○面」が存在する。(2)「○○面」と本山寺院の組み合わせにも異なるものが存在する。(3)「○○面」の由来には諸説ある。この(3)については次節で検討する。

3、大正〜明治

管見では、明治・大正の「○○面」の用例は、妙心寺と関係のある人物の文章中にしか見つけられない。そのため「○○面」は、妙心寺辺りから発生し広まったと推測する。しかもそれには村田無道の著述の影響が大きかった。

行論の都合上、まず村田無道(二八八〇〜一九三三)の「略年譜」を掲げ、次に「○○面」の用例を列挙す

る。尚、冗長の譏りを受けるであろうが、以下に掲げる資料『正法輪』等については、一般には閲覧しがたいものでもあり、また根拠を明確にするために、前後の部分を含めて長文の引用を行う。

「略年譜」⁽¹³⁾

明治一三年(二八八〇)四月二一日、愛知県丹羽郡丹陽村(現…二宮市)で、竹之内文七とミルの五男

として生まれ、幼名は國次郎

明治二四年(二八九一)(二二歳)愛知県碧海郡(現…豊田市)の妙心寺派龍興寺の井村良遂に弟子入り

(翌年同寺にて得度、紹運とよばれる)

明治三一年(二八九八)(二八歳)兵庫県多賀郡杉原谷村(現…多可町)の妙心寺派雲門寺の関弘道の弟

子となり、⁽¹⁾天龍僧堂に掛搭(時期は不詳だが、これより先、徳源僧堂にも掛搭)⁽¹⁴⁾

明治三三年(二九〇〇)(二〇歳)普通学林(後の花園学林、現…花園大学)に入學

明治三九年(二九〇六)(二六歳)⁽²⁾花園学林実修科卒業⁽¹⁵⁾。妙心寺の機関雑誌社・正法輪社の記者と

なり、⁽³⁾天龍僧堂に通参、何休庵と号す

明治四二年(二九〇九)(二九歳)二月二日、京都府南桑田郡稗田野村(現…亀岡市)の妙心寺派龍潭寺

に村田祖秀の後住として入寺、村田無道として第二二世住職となる。四月二五日、⁽⁴⁾無

著道忠撰『禪林象器箋』(貝葉書院)を出版

大正元年(二九一二)(三三歳)この頃に正法輪社を辞す⁽¹⁶⁾

大正三年(二九一四)(三四歳)巡教師となる⁽¹⁷⁾

大正五年(二九一六)(三六歳)七月六日、『參禅実話』(東亜堂書房)出版

大正六年 (一九一七) (三七歳) 九月二五日、『禅心生活』(日東堂)・十月二日、『修養百話』(日東堂) 出版

……(中略)……

昭和八年 (一九三三) (五三歳) 二月八日、示寂

《25》村田無道「妙心寺の算盤面」(『參禅実話』東亜堂書房、大正五年「一九一六」七月六日、一五〇～一六〇頁)

^a 京都の臨濟宗七本山の中で、昔から斯ういふ三つの言ひ草を傳へてゐる、曰く^b 相國寺の聲明面、天龍寺の伽藍面、大徳寺の茶の湯面、妙心寺の算盤面と、聲明とは梵唄の事で、即ち法式の事である、禪宗は一體法式を八釜しく云ふ宗旨であるが、その中でも相國寺は殊に嚴重で且つ綿密であった、例へば懺法の如きでも妙心寺の式が五時間で済むならば、相國寺は優に七時間かゝると云ふ工合に、法式が却々八釜しかつた、乃で遂ひ。相國寺の聲明面と云ひ出したのである、天龍寺の伽藍面とは、現今でこそ伽藍の最も完備せるは妙心寺であるが、これは近古の事であつて、ズツト昔は天龍寺が第一等であつた、天龍寺は傑僧夢窓國師が時の將軍足利尊氏の歸依を受けて、後醍醐天皇の追善の爲に建立した寺であるから、思ひ切つて規模の雄大なものであつたらしい、口碑に據ると、昔し天龍の總門は今の太秦村にあつたと云ふ事だから、その境内の廣闊にして伽藍の堂々たるものであつた事は、略ぼ推測される、即ち天龍は伽藍を以て勝つてゐた所から、天龍寺の伽藍面と云ひ、大徳寺の茶の湯面とは大徳は茶の湯の元祖であつたからである、然らば妙心寺の算盤面とは何ういふことかと云ふに、有體に言へば妙心は馬鹿に算盤を弾くことが上手であつた、と云ふと、何だか禪坊主でないやうであるが、決して爾うでない、茲に「郷土光華」篇中に入れる一つの自慢面の話がある、

……(中略)……之を要するに妙心寺が今日の隆盛を齎らしたのは、彼の經濟の點に注意したのと、次ぎには妙心獨立の眞風を擧揚して、活禪を活地に活用した、此の二原因に外ならぬ、此二原因より漸次妙心が他山を凌ぎ初めてから、他山の僧侶が岡焼き半分に云ひ傳へたもの、是れ「妙心寺の算盤面」である、

「〇〇面」を「京都の臨濟宗七本山の中で……の言ひ草」(傍線 a)とし、「相國寺の聲明面」「天龍寺の伽藍面」「大徳寺の茶の湯面」「妙心寺の算盤面」(傍線 b・c)があつたとする。ただ「三つの言ひ草」(傍線 a)は、後掲の《26》〜《28》からも明らかのように校正ミスであろう。また傍線 e「郷土光華」篇とは、次の資料を指す。

《26》村田何休「妙心寺の算盤面(山城)」(『日本及日本人 臨時増刊第六六五号 郷土光華号』政教社、大正四年「一九一五」十月五日、一〇七頁)

京都の臨濟宗七本山の中で、昔から斯ういふ「三つの言ひ草」を傳へてゐる、曰く、相國寺の聲明面、天龍寺の伽藍面、妙心寺の算盤面と、……(中略)……乃で遂ひ、相國寺の稱名面と云ひ出したのである、

《25》とはほ同文のため、冒頭の比較すべき箇所引用にとどめるが、《25》の前年に出版された《26》には「三つの言ひ草」(傍線 f)だけを載せ、「大徳寺の茶の湯面」を記さない(傍線 g)。相國寺についても《25》傍線 b・cと異なり、「聲明面」と「稱名面」が混在している(傍線 g・h)。また村田は《26》発行の三ヶ月後に『正法輪』にも同じ内容の文章を掲載している。

《27》村田無道「雜纂寺院經濟と雪江和尚」(『正法輪』三五一号、大正五年「一九一六」一月一日、一五頁) まず序文に村田は次のように記す。

本篇は予が去る十月十五日發行の『日本及日本人』の郷土光華號『大典記念號』に「妙心寺の算盤面」と題して掲載し、幸に三百篇中三十篇の佳稿に選拔されたるものなるが、然るを京都法藏館發行の『新布教』より、本稿は寺院住職の經濟に付き一讀すべき文字なるを以て轉載を請ふとて、是れ又同誌の去月十五日號に登載され、諺に佛の顔も三度と稱すれど、前記二雜誌と本誌とは讀者を異せるを以て茲に改題して三度のお勤めをなさしむ可く掲載すること、せり。先年予が本誌に在職中同じく「妙心寺の算盤面」と題し掲載したることあれども、それと此れとは勿論同意異なり、讀者幸に一讀の榮を賜はゞ幸甚何ぞ之れに過ぎん。

次に本文が続く。

京都の臨濟宗七本山の中で、昔から斯ういふ四つの言ひ草を傳へてゐる、曰く、相國寺の聲明面、天龍寺の伽藍面、大徳寺の茶の湯面、妙心寺の算盤面と……(中略)……乃で遂ひ相國寺の稱名面と云ひ出したのである、

《27》の本文も《25》とほぼ同文である。ただ《25》と異なり「四つの言ひ草」(傍線k・l)と正しく記す。しかし《26》と同じく「聲明面」と「稱名面」が混在している(傍線l・m)。次に序文に言及される傍線i・jの文章を掲げよう。

《28》村田何休「妙心寺の算盤面」(『新布教』二八号、法藏館、大正四年「一九一五」二月一日、一一三頁)

京都の臨濟宗七本山の中で、昔から斯ういふ三つの言ひ草を傳へてゐる、曰く。相國寺の聲明面、

天龍寺の伽藍面、妙心寺の算盤面と……(中略)……乃で遂ひ^p相國寺の稱名面と云ひ出したのである、

《25》とはほ同文であるが、《26》と同様に「三つの言ひ草」(傍線^o)だけを載せ、「大徳寺の茶の湯面」を記さない(傍線^o)。また《26》《27》と同じく「声明面」と「称名面」が混在している(傍線^o・^p)。

《29》何休菴主人「妙心寺の算盤面」〔正法輪〕二五六号、明治四一年「一九〇八」一月二日、七九頁)

昔から京都の七本山で、相國寺の稱名面、妙心寺の算盤面と云ふことを能く言ふ、相國寺の稱名面と云ふのは、相國寺は昔から梵唄……維那の節……を八釜しく云つて、例へばイスの段の此處では斯う云ふ工合に引つ張る、其處では恁う云ふ調子で聲を二つ振ると云ふ工合に却々八釜しい、従つて他山とは違つて凡ての法式が嚴重で又綿密である、織法の如きも妙心寺のが五時間で済むものなら相國寺のは優に七時間かゝると云ふ調子で法式上の事に就ては實に一籌を輸せなかつた、妙心寺の如きも彼の有名な無着和尚時代迄は、之れぞ妙心寺の法式であると云つて、一定した法式が無かつたが、^r無着和尚がセツセく、と相國寺に通はれて充分研究した上、彼れの長を採り我が短を捐て、茲に始めて妙心獨特の法式を制定せられたと云ふ事も聞いて居る位で、兎に角相國寺は法式が嚴重であつて、それが此の山の特長であつた所から、ツイ相國寺の稱名面と言つたのだ相であるが、然らば妙心寺の算盤面と云ふ意味は何う云ふ事であるか、相國寺の稱名面は能く會得された、が、妙心の算盤面とは何の意味か、と穿鑿して來ると薩張判からない、……(中略)……段々考へた末、吾輩は斯う斷定を下した、

今でこそ妙心寺は財政紊亂で、彼の前田事件以來一度ならず二度迄も大破綻が有つて秩序がスツカ

り濫れて居るが、之れは近頃の状態で昔の妙心寺はさうでなく、會計簿などが充分整頓して居て厘木の差と雖も収支符切を合はするが如く遣つたものに相違ない、恁う云ふ調子で會計上の事に就ては凡て公明正大に且つ壹厘壹錢の微と雖も違算なきことを期したから、内容が益々充實して行く、^sズツト五山を凌いで富贍の第一位を占めた、乃で他山の者が岡焼き半分に妙心寺の算盤面と云ひ出したに相違ない、それでなければ斯の算盤面と云ふ意味の解釋が出来ぬ、併し之れは吾輩の獨斷であるから、果して然うか何うかは判らぬ、で吾輩は吾輩の説を確むる爲に山内の某師に就て質して見た所が、果然、吾輩の觀察が正確であつた、

何故妙心寺を算盤面かと云ふと、妙心寺には日單(ヒタンと讀む)と云ふものがある、斯の日單は彼の地方寺院で云ふ日單、即ち一年中の日誌簿かと云ふに左様でなく、會計簿のことで、斯の會計簿は從來何處の山にもあるが、特に妙心寺の會計簿は他山の會計簿に比較して餘程能く整頓して居る、某師の説明に依ると其會計簿の内容が佛法僧の三寶に分つて其配當が巧みに出來て、而も斯の例が他山に無い所からツイ妙心の算盤面と云ひ出したのだと言はれたが、吾輩が實地に就て見た所では必ずしも三様に分れて居らぬが、……(中略)……兎に角……(中略)……其複雑せる日單即ち會計簿が妙心寺は特に整頓して居た所から妙心寺の算盤面と云ひ出したのだ、所で此の算盤面と云ふ言葉を解剖して見ると頗る面白い、一體面と云ふ言葉は到底尊敬した意味の言葉でない、泣き面に蜂とか、彼奴の面を見るとか云つて、此の面と云ふ言葉は尊稱語ではない、否な大に侮蔑の意味を含蓄して居る、で之れは妙心自身に云ひ出したものでなくして他山の者が云ひ出した言葉であることは、蓋し疑を容れまいと念ふ、他山の者が妙心寺を捉えて算盤面と言つた、甚だ侮蔑して居る、失敬なことを言つて居る、が併し一種侮蔑の意味を含んだ此の言葉が妙心寺の内幕を十二分に解釋して居るから面白

い、妙心寺の會計が如何に健全であつたか、如何に手ぬかりが無かつたか、如何に公明正大であつたか、判る。

この《29》は《25》の八年前に掲載された文章だが、当初の「〇〇面」は傍線dの「相国寺の称名面」と「妙心寺の算盤面」だけであつた。

またこの後《25》～《28》において、「天龍寺の伽藍面」が追加されたのは、前掲「略年譜」傍線(1)・(3)に見えるように、村田が天龍僧堂に掛搭・通参し、天龍寺と関わりが深かつたため、《25》傍線dのように、天龍寺の伽藍がかつては壮大であつたことを聞き知って、村田自らが「天龍寺の伽藍面」の語を作成したのではないかと私は疑う。さらに「大徳寺の茶の湯面」についても、大正四年(一九一五)発行の《26》《28》には記されていないが、翌五年の《25》《27》になつて「大徳寺の茶の湯面」が追加されている。これは、たとえば次に掲げる《30》に、花園隠士という人物が「大徳寺の茶の湯面」について記しているの、そうしたものに依拠して「大徳寺の茶の湯面」を追加したと推測される。

《30》花園隠士「妙心寺史談(六)」(『正法輪』二九三号、明治四十四年「一九一三」二月二日、一六頁)

昔から妙心は算盤面と謂はれ、大徳は茶の湯面と云はれて來たが、如何にも爾うで、妙心は飽迄算盤面で、大徳は飽迄茶の湯面である、それは双方の伽藍を見ても解る、妙心は七堂伽藍立ち駢んで、如何にも宏壯は宏壯であるが、併し何處かせ、こましい處がある、餘裕がない、又一方の大徳はと見ると、塔頭の孤峰菴とか眞珠菴とか聚光菴とかは悉く茶の湯式で、柱一本、底石一つ、悉く茶の湯面あらざるはなしだ、

前掲《29》の三年後、明治四四年(一九一三)刊行の《30》において、「妙心寺の算盤面」と「大徳寺の

茶の湯面」が対比して記されている。

また「相国寺の声明面」は、《29》傍線rによると、あの無著道忠が相国寺に通い法式を研究した位に、相国寺は法式が嚴重であったために称されたということになる。しかし私見では、前掲「略年譜」傍線(4)に見えるように、《29》発行の翌年に村田が無著道忠撰『禪林象器箋』を出版するが、村田はその際に無著の伝記を付記している。その執筆過程で、無著が龍安寺の塔頭宜春院の演溪和尚から相国寺黙堂流の声明を習っていたことを知り、そこから、村田自身が「相国寺の声明面」の語を作成した可能性を想定すべきだと考える。ただし、この《29》では、おそらく「声明面」と同音であったために「称名面」と誤って記してしまい、その後《26》《27》《28》の文中でも、校正が不十分であったために「称名面」「称名面」が混在し、最後に《25》の『參禪実話』に収録するに当たって、ようやく全て「声明面」に校正が完了したのではないかと推測される。

そうすると「妙心寺の算盤面」だけが最初に出現し、他の本山寺院の「○○面」がその後につけ加えられたことになるが、私がなぜそう考えたかと言えば、次の《31》の燕處子の文章がその根拠となる。燕處子なる人物については不詳だが、文中に「余輩は地方を巡視する毎に」(傍線x)とあるので、妙心寺派の巡教師であったと想定される。また村田無道は前掲『略年譜』傍線(2)によると、《31》が掲載された翌年、明治三十九年(一九〇六)に花園学林を卒業し、『正法輪』の編集に加わるのだから、燕處子は村田とは別人となる。

《31》燕處子「何故に本山は不信用なるか」(『正法輪』二二三号、明治三十八年(一九〇五)四月二日、九・一〇頁)

v 世人は云ふ、妙心寺は算盤的なりと、其意は先づ事をなすに利害得失より打算して始むるを謂な

り、……(中略)……本所は賦課金の徴集に汲々とし、塔頭は寄附金の募集、護持講の勧募に日も亦足らざる今日にありては末派の本山を目して取立主義なりと罵詈するは強ちに無理ならぬことなり、若し斯くの如くして數年を過さんか本山の威信は益々落下して末派をして本山は吾々のお蔭にて衣食し得るなりとの思想觀念を抱かしむるに至るや燎として明なり、余輩は此故に本所職員諸師を始め塔頭住職の諸師に苦言す、本山の威信を保つ爲に算盤主義を止めよ、算盤主義は末派をして諸師が滿腔の護法心に一点の疑惑を挿ましむる動機たればなり、記憶せよ諸師が法會を行ふも懺法を修するも露骨に利不利の打算をなすは其功德を滅却せしむるものたらざるばあらざるなり、呉れくも記せよ、末派の財力を吸集せんと欲せば先づ其に伴ふ成果を示せ、然らざれば^w末派をして、取立主義の本山なり、算盤主義の本山なりとの言を止めしむるの期なかるべし、

以上論じ來りし處を以て末派の實際と相對比せば末派にも亦幾許の不徳義あるを察するに難からざるなり、即ち末派寺院の中には本山側の不徳と不信用とを針小棒大に言ひ觸らして自己の不宗盟を覆はんとするものなきにあらず、換言せば末派寺院の中には内心上納の義務を認めながら言を左右に托して當然の義務を免れんとする不徳義の人尠からざるなり、^x余輩は地方を巡視する毎に此種の人の意外に多きに一驚を喫せざるを得ず、寄語す末派寺院諸師よ、諸師は諸師の組合中より此種の人々を擯斥して組合内の制裁を勵行せざれば本山側の人士をして末派は不宗盟なりとの言を嘘ならしむる能はざるべし、

まず、この《31》からは、明治三八年(一九〇五)時点で「妙心寺は算盤的なり」(傍線^v)と言われているもの、「算盤面」とは称されていなかったことがわかる。また、妙心寺本山・塔頭が、末寺から「事をなすに利害得失より打算して始むる」(傍線^v)寺だと罵倒されていたこともうかがわれる。

つまり、《31》では、妙心寺本山の上納の要請に対して、あまりにも理不尽で取り立てがすぎるとの不滿が、妙心寺派末寺からぶち上げられているが、そうした罵詈雑言の中に「算盤的」「取立主義」「算盤主義」(傍線v・w)があつて、それらは「算盤面」よりも先に存在していたのである。

そして、かかる「算盤的」「算盤主義」に含まれる「算盤」の語に「面」をつけて称するようになったのは、村田が《29》傍線uで述べるように、「面と云ふ言葉は、……侮蔑の意味を含蓄して居る」からであつて、「算盤面」には、このような由来が想定できると考える。しかもその含意を承知の上で、妙心寺内において、さらに《29》傍線s・tのように、「算盤面」は、妙心寺の巧みな会計制度に対する他山の嫉妬から発生した言い草という巧妙な捉え直しがはかられたのではなからうか。

おわりに

「○○面」のもっとも古い用例は明治時代のものであつた。そして村田無道によると、「○○面」は俗ではない京都の臨濟宗七本山内での言い草であつた。特に「妙心寺の算盤面」は、妙心寺が他山を凌いでいたため、他山の僧が焼き餅を焼いて言い伝えた可能性が高くなる。

しかし村田より前に、燕處子なる人物によつて、妙心寺派末寺が本山の取り立ての厳格なのに対して、妙心寺本山・塔頭を指して「算盤的」「取立主義」「算盤主義」と罵つていたことが明らかになっているので、「算盤面」の実際の由来はその辺りではないかと考える。

また「○○面」と本山寺院の組み合わせについても、「妙心寺の算盤面」以外は固定されたものではない。ただ相国寺については「声明面」と「称名面」の二つがあるが、ひらがなで記せば「しようみようづら」で一貫している。事実「相国寺の声明面」は「妙心寺の算盤面」とほぼ同時期にあらわれた、最も古

い「〇〇面」の一つである。しかしながら相国寺の場合、その理由は不明だが、本山寺院として採りあげない書籍もあって、そのような扱われ方が辞典類や『京都・観光文化検定試験 公式テキストブック』にも影響し、「相国寺の声明面」が掲載されなかったものと推測する。

そして大徳寺の場合、「〇〇面」には「茶」の字がすべて入り、時の経過とともに「茶の湯面」「(お)茶人面」「茶面」と変化しているように理解される。なお「茶面」という呼称と「〇〇面」の由来を京童の口遊とする説は、戦後になって前掲『京都の歴史三 近世の胎動』あたりが唱え始めたのではないかと私は疑う。

以上の三ヶ寺よりややおくれで、大正時代になると、「天龍寺の伽藍面」が出現する。しかし天龍寺の場合、戦後は、時おり「武家面」「学問面」「羅漢面」と組み合わされるだけであり、しかも「伽藍面」は、もっぱら東福寺と組み合わせられるようになってしまふ。そのため、天龍寺の「〇〇面」に関しては、書籍類への採用も、他の本山寺院に比べて少なくなってしまったのであろう。

他の南禅寺・建仁寺・東福寺の「〇〇面」に至っては、管見では昭和になって初めて発見される。このうち建仁寺は「学問面」、東福寺は「伽藍面」で組み合わせがほぼ固定されているが、南禅寺は「貴人面」「武家面」「公卿面」「役人面」「僧録面」とその組み合わせが一定しない。

私見によると、「京都・観光文化検定試験」いわゆる「京都検定」が始まって、しばらくして、こうした事実にも目配りが利くようになって、まず「〇〇面」に関する出題がとりやめられ、次に祇園祭の実施方法の変更に伴う『京都・観光文化検定試験 公式テキストブック』の大幅増補に乗じて、「〇〇面」の記述も粛々と削除されたと理解される。

要するに、私の結論は「(〇〇面)のうち〈妙心寺の算盤面〉が、明治末期に現れたが、それは本来、

妙心寺派末寺の妙心寺本山・塔頭に対する罵倒の言葉であった可能性が高く、その〈算盤面〉の語に対して、新たに妙心寺内において他山のおかやきから発生した言い草であるとの巧妙な捉え直しはかられ、それに伴い、他の京都の臨濟宗の本山寺院にも、適宜〈〇〇面〉が割り当てられるようになったのではないかと推察される。少なくとも管見では「〇〇面」の用例は明治末期の妙心寺派内のものまでしか見つけられず、「〇〇面」が江戸時代に出現したという証拠はどこにも得られなかった。また「〇〇面」が京童の口遊やあだ名・諺に由来するという根拠も、これまで示されたことなど全くないのである。

(1) 「京都検定」は、京都商工会議所が主催する、観光業界のおもてなし向上を目的として、二〇〇四年にスタートした検定試験。二〇二二年現在、一級・準一級・二級・三級の試験が実施されている。https://www.kyotokententei.jp/about/参照。

(2) 「京都検定」の「〇〇面」に関する出題状況は次のとおり「以下()内の数字は問題番号を表す」。第一回三級(三三)、第二回三級(九五)、第三回二級(七六)、第四回三級(一七)・一級(二三)、第五回三級(一九)・二級(二五)、第六回三級(二七)、第七回二級(二〇・八五)、第一二回三級(二七)。なお「京都検定」では試験問題に関する問い合わせには一切答えられないとのことである(注1参照)。

(3) 【新版】では、平成二六年(二〇一四)に、祇園祭の山鉾巡行が前祭と後祭の二回実施へと変更になったのに伴い、「公式テキスト」「増補版」に五六頁の大幅な増補が行われた。ただ祇園祭以外の項目の追加・削除に関しては、具体的な説明はない(https://www.booktankosha.co.jp/shopdetail/00000000844/参照)。しかしながら私見ではあるが、検定試験の公式テキストである以上は、ホームページ上で【旧版】【新版】の変更箇所を新旧対照表で掲載し、なおかつその変更理由も公に示すべきものであると考える。

(4) <https://www.kyotokentaine.jp/about/level.html> 参照。

(5) 比較的良好的な二例を掲げ、問題点を指摘する。

「1」京都市立図書館への質問とその回答(公開日、平成三四年「二〇二二」六月八日、「レファレンス事例検索」[https://

www2.kyotocitylib.jp/?page_id=483]より検索)

【質問】

京都の寺の「〇〇面」について、どこが何面か、またその理由を知りたい。

【京都市立図書館の回答】(以下、【回答】と略す)

臨濟宗寺院に対する、各寺院の特徴をつかんだ「〇〇面」という呼び方は、京童の口遊によるものであると考えられ、次のようなものがあります。

A、大徳寺の茶面…茶道にゆかりが深いことから

B、建仁寺の学問面…多くの学問に秀でた人物を輩出したことから

C、東福寺の伽藍面…壮大な伽藍をもつことから

D、妙心寺の算盤面…しっかりとした寺院経済組織が存在することから

E、相国寺の声明面…独特な節回しの声明が発達し、伝えられていることから

F、南禅寺の武家面…武家の信仰が篤いことから

六つすべてが紹介されている資料は確認できませんでしたが、下記の参考文献の中で少しずつ紹介されています。

参考文献

(1) 生きる心の糧 11 九一〜九八頁 A・B・C・D掲載

(2) 古寺巡礼 京都 3 東福寺(新版) 一〇二頁 A・B・C・D・E掲載

- (3) 京都なるほど事典 四八〇九頁 A・B・C・D・E掲載
- (4) 古寺巡礼 京都 8 相国寺 (新版) 一三五頁
- (5) 古寺巡礼 京都 17 大徳寺 (新版) 一〇八頁
- (6) 古寺巡礼 京都 23 建仁寺 (新版) 一三八頁
- (7) 古寺巡礼 京都 31 妙心寺 (新版) 一〇六―一一頁

この【回答】には矛盾が存在する。【回答】が挙げる参考文献中に「F、南禅寺の武家面」は見つけられないのである。
[2] かげまるくん行状集記 (<http://www.kagemarukun.from.jp/page04.html>参照)

「妙心寺の算盤面」について、まことしやかに伝えられる伝説があります。……(中略)……学生時代に同期のT氏に聞きました。その伝説を要約すると、「ある時ある信者(朝廷とも)から妙心寺と大徳寺に以下のような申し出があった。それは牧溪の絵の寄進と、ある一定の金の寄進と、どちらか好きな方を選び受け取って欲しいというものであった。妙心寺は迷うことなく(カネッ! 金!) (↑T氏はこう言っていた) といって、金の方を選び、一方の大徳寺は文化を重用視して(では、牧溪の絵を……) といった。そのため世間の人々は妙心寺の先見性の無さと過度の吝嗇ぶりを嘲笑して(ソロバン妙心寺)と呼ぶことになった。」というものです。K氏や東京にある某国立大学の先生もこの「妙心寺の算盤面」に関する伝説をいっていましたので、かなり有名な伝説のようですが、そのソースについて聞いてみると「知らない」とか「忘れた」と言われてしまいます。……(中略)……ところが今日なげなく『正法山誌』……(中略)……をみると、「妙心寺の算盤面」に関する伝説に似た記事がありました。

以上の説明で、「妙心寺の算盤面」の由来がわかり、またその根拠が『正法山誌』と判明する。

しかし二つの問題がある。第一に『正法山誌』に記される伝説は、すでに荻須純道「妙心寺のそろばんづら」(山田無

文老師古稀記念集『花さまさま』春秋社、一九七二、三三三頁 後に『禪宗史の散策』〔思文閣出版、一九八二〕に収録が公にしている。第二に、荻須氏はこの伝説を「算盤面」の由来とは見なしていない。

荻須前掲「妙心寺のそろばんづら」は、まず二つの面から雪江宗深（一四〇八～一四八六）を評価する。

雪江には四人の大弟子があった。すなわち景川宗隆（龍泉派）・悟溪宗頓（東海派）・特芳禅傑（靈雲派）・東陽英朝（聖沢派）であり、……（中略）……各特色をもつて禅風をあげた。雪江の妙心寺復興は単に伽藍の造営だけではなかった。まず人物を作ることであった。……（中略）……また雪江は金銭米穀出納帳を作り、厳格な会計法を定めた。……（中略）……これがため内においては坐禅面であっても、外部の者は妙心寺のそろばんづらと批評したのである（三三二・三三三頁）。

続けて妙心寺へ土地を寄進した利貞尼について記し、その二十数年後の話として、前掲『正法山誌』の伝説をとりあげ、妙心寺の山門建立に言及するだけなのである（三三三頁）。

(6) <https://privatter.net/p/1889980> 参照。

(7) 後に『京の古寺歴史探訪—京都文化の深層』（淡交社、二〇一〇）に収録。

(8) 後に『街道をゆく三四大徳寺散歩 中津・宇佐のみち』（朝日新聞社、一九九〇）に収録。

(9) 注(7)参照。

(10) 『12』『13』『14』は、各々『世界大百科事典』改訂新版（平凡社、二〇〇七）一七巻・四一頁、二〇巻・一二三頁、二七巻・五三〇頁にも引用部分があるまま収録される。

(11) 後に『禪宗史の散策』に収録。注(5)参照。

(12) 以下、戦時中～明治時代の文章のルビには複雑な場合があり、適宜省略した。

(13) 「無道和尚の生い立ちと経歴」（長尾龍雄『村田無道「禅の世界」』龍潭寺「非売品」、一九九八、一五・一六頁）をもとに作成。

- (14) 村田無道『參禪実話』（東亜堂書房、一九二六、三八～四〇頁）に「初めて天龍寺に掛錫した時、同僧堂の門前に佇んで、吾を忘れて泣いたことがある。：（中略）：衲は是より先き名古屋の徳源寺に掛錫してゐて：（中略）：…殊に十九歳の初旅と来て」とある。
- (15) 「第十二學年度卒業生 實修科卒業生」名簿（『正法輪』二三五号、明治三十九年「一九〇六」四月二日、二六頁）に「播磨國一等地雲門寺徒竹内無道」とある。
- (16) 何休庵主人「清僧論」（『正法輪』三二六号、大正三年「一九一三」十一月二日、一五頁）に「自分が田舎にすつ込んでから、早や一年有半になる」とある。
- (17) 何休庵主人「藝備巡教漫語（上）」（『正法輪』三二二号、大正三年「一九一四」四月二日、二〇頁）に「子が巡教使を拜命したるは今次を以て嚆矢とす」とある。
- (18) 序文の錯簡は私に修正した。
- (19) 後のものだが、たとえば飯田利行『字聖 無著道忠』（禪文化研究所、一九八六）四七・八頁参照。

京都臨濟宗各本山寺院の「〇〇^{づら}面」について——「妙心寺の算盤面」由来試論——(加藤 一寧)